

英雄神話『緋文字』の意味

— 執筆の私的要因と社会的要因 —

高 島 まり子

序

既に拙論¹で、『緋文字』を男性の自我発達の元型的プロセスを描いた一種の英雄神話であると論じた。即ち、両義的で圧倒的な力を持つ「原父」（「共同体」）と「原母」（Hester）に挟まれた「息子＝自我」（Dimmesdale）が、「原両親」と彼らから派遣された「竜」（Chillingworth）の各々を否定面と肯定面とに解体し、前者を殺し後者を統合して「竜退治」に成功し、英雄的な独立を獲得するというものである。また拙論²で、原作がプロットの上ではそのような男性の自我を主人公とする英雄神話の枠組みをとりながら、実際にはDimmesdaleがHesterの女性的な力に押しやられ促されて独立を果たす受動的「英雄」であり、神話『アモールとプシケー』におけるプシケーの女性としての自我発達プロセスにも似たHesterの内面的な発達が、プロットを展開する推進力となっていることを論じた。これらの論に立脚して、本稿ではなぜ作者が19世紀の半ばという時代にこのような一種の英雄神話を、それも女性的な力の決定的な介入によって新たな男性的価値が獲得されるプロセスとして描いたのか、執筆の私的要因と社会的要因の両方を考えることによって、『緋文字』の作品解釈に新たな視点を持ち込みたい。その際、「自我」Dimmesdaleの元型的発達を「原父」と「原母」の否定面の克服と肯定面の統合とに分けて、それらの各々にいかなる現実の要因がいかに作用したのかを考察したい。

拙論¹で述べたように、筆者は神話の登場人物を現実の家族を構成する個人として、また神話をそのまま心理的現実として捉えるフロイト理論でなく、神話の登場人物はすべての人間の内界に生きている超個人的な元型のイメージが投影されたものであるとするユングの理論に立脚して、原作を一種の英雄神話として解釈した。原作の登場人物や人間関係、あるいは状況に、神話に現われる典型的な元型イメージが読み取れ、プロット全体がノイマンの言う人類の「意識発達の元型的な諸段階」²を表わす一連の神話の内の英雄神話に対応しているからである。ところで元型イメージは、時間・空間を超越した普遍的、超個人的なものである。したがって原作が元型イメージに満ち、元型的状況を描いた一種の神話であるとするならば、作品成立の私的、社会的要因といった個人的事情、あるいは時間・空間が限定された現実状況を考察することは、ユングの理論とは矛盾すると考えられるかもしれない。しかし河合隼雄氏も言うように、同じ元型イメージであっても神話や民話、童話などにおけるその現れかたや意味は、時代や地域によって様々である。³まして一作家が書いた作品であれば、原作の元型的意味が作者の生きた時代や社会的状況によって左右されるのは当然であろう。しかも作品『緋文字』の序として「税関」が配置され、19世紀と17世紀を往復するかのような効果を持つ原作を全体的に捉える場合、当然そこには元型イメージを喚起した19世紀の現実の人物や状況の存在が重要な意味を持つ。以上の理由から、作品成

立の私的・社会的要因を考察しなければならないのだ。ただし、その場合、モデルとなった現実の個人や状況をそのまま原作の文脈にあてはめるのではなく、それらが作品及び作者にとっていかなる元型的役割を果たしているかを考えなければならない。それゆえ既に述べたように、「自我」Dimmesdaleの元型的発達プロセスの四つの局面に対応する現実の様々な執筆要因を挙げ、それらが果たしている元型的役割を検討していくことにする。

I

原作に現れる「原父」の否定面は、「息子=自我」の独立を阻止する「恐ろしい精神父」として描かれた「共同体」の内なる悪（本質的な自省の欠如、そこから生まれる偽善と不寛容等の）と、「原父」及び「原母」の使者として派遣されたChillingworthの「悪魔」性である。前者に関連してすぐに連想されるのは「税関」にも直接描かれている作者の祖先、各々クエイカー教徒の迫害と魔女裁判で悪名高いウィリアム・ホーソンとその息子ジョンである。彼らは17世紀のピューリタン神権体制の支配階級に属し、軍人、立法者、裁判官として君臨した。作者は前者を「彼の善行の数はたとえ多くとも、そのどんな記録よりも、残虐行為の事件のほうが長く残るのではないだろうか」、後者を「(魔女)たちの血が彼に汚点を残したと言ってもさしつかえないほどである」と厳しく批判する。⁴そして彼らの招いた呪いが一族の零落の原因であり、自ら祖先の恥を背負いその呪いが取り除かれることを祈っている。作者はHesterを「魔女」の如くに迫害する「共同体」の冷酷で狭量な指導者達の中にこの祖先の姿を描きこみ、彼らをDimmesdaleに最終的に拒絶させることによって、祖先の罪を償おうとしたのではないか。更に『魔女』においてミシュレが描いているように、「魔女」という概念を「自然」に直結する「<女性>に固有の<精髓>とその気質⁵」と捉えれば、作者の祖先も「共同体」も単に無実の人々を迫害した非情な権力者という個別的存在に留まらない。自然に根差す豊かな生命力の源である「太母」元型的な女性性を圧殺する、硬直した父権的・精神的価値の代表者として、彼らはより普遍的な意味を持つことになる。この「母元型」と「父元型」の対立を、ロマン主義についてのレスリー・フィードラーの言葉を借りて、(ロマン主義が表現していた)「家父長制的世界への女性的原理の侵入であって、……<大いなる母>の復讐⁶」の一形態と捉えることもできる。即ち、『緋文字』の冒頭に描かれる「共同体」とHesterの対立は、19世紀における父性原理と母性原理の対立を17世紀に移しかえたものと考えられる。したがって23章における「共同体」の指導者達に対するDimmesdaleの最終的な拒絶を通して、作者は祖先の罪の浄化という私的な目的を果たすばかりでなく、父権制における女性性の抑圧と女性的価値の低下を批判し、豊かな生命力を持つ女性的心性の復権を主張するという普遍的な目的を果たしていると言えよう。同時に、祖先の罪が一族の零落の原因であると考え、自ら姓の綴りを変えるほどの罪悪感を抱いていたことは、彼の主張がいかに切実であったかを物語っている。

このように、Hesterに対する苛酷な断罪は、父権制における女性性の価値低下と抑圧という文化的な問題を含んでいるが、アメリカの歴史という国家的な視点から見れば、また別の問題が浮上する。彼女の「太母」元型としての女性性より姦通という罪の方に重点を置くと、「共同体」の仕打ちは、罪の存在を許さない「エデン的な世界を求めたアメリカの情熱⁷」の表われと言えそうである。大井浩二氏は

当時のピューリタン達の意識に「庭園の神話」の存在を見出だし、作者は「丘の上の町」としての「完全無欠な理想社会の建設」⁸を目指す彼らの姿に、19世紀のアメリカ人の「アメリカをくメシア」と同一視し、世界の中心にアメリカをすえようとする、絶対的なアメリカ中心主義⁹を重ねて、同時代人の国家的エゴを痛烈に批判していると主張する。この点は、原作執筆の社会的要因の一つと考えられるのではないか。そして更に問題としたいのは、この19世紀のアメリカ人の傲慢とも言えるナショナリズムが、先述の父権的文化における女性性の否定とどこで結び付くのか、ということである。

原作の背景である17世紀のピューリタン「共同体」と、原作が執筆された19世紀のアメリカに共に強力な「庭園の神話」が存在するとすれば、この神話の源であるキリスト教の神の性格に言及せざるを得ない。フィードラーは、この神は「太母」たる「母神とともに王座につくことを決して肯んじない神」で、「たいへん孤独な神であって、単独で、抽象的な栄光として君臨しようとする」¹⁰と述べ、「庭園の神話」を生み出したキリスト教が、母性原理と対立する父性原理に基づく宗教であることを示す。この母性原理と父性原理に関する河合隼雄氏の説明によれば、¹¹前者は「包含する」、後者は「切断する」機能にその特性を示すのだという。したがって、「徹底的な受容による救済」をもたらす母性的宗教に対して、父性的宗教はすべてを善と悪に切断し、悪を容赦無く切り捨てる。このようなキリスト教を背景として完全無欠な理想社会を目指す国家が、非常に父権的な国家となるのは当然であろう。とすれば、19世紀のアメリカは17世紀の「共同体」と同様に女性性を抑圧した非常に父権的な社会であり、作者は「共同体」のHesterへの仕打ちに批判を加えることによって、同時代人の傲慢なナショナリズムを批判すると同時に、アメリカにおける父権的価値観の行き過ぎと女性性の抑圧という欠陥に、警鐘を鳴らしていたのではないか。

こうして作者は、Dimmesdaleに対する「恐ろしい精神父」元型によって、極端な父権的価値の代弁者を三つ挙げていることになり、その各々が「息子」の独立を阻止しようとするのだ。即ち、原作では、「共同体」がDimmesdaleに優秀な後継者の牧師というペルソナを押しつけ、告白を阻止する。作者の私的レベルでは、父方の祖先が国家体制を継承するような後継者の役割を彼に求め、「作家」というアイデンティティを否定する。また社会的レベルでは、19世紀のアメリカが国民に傲慢なナショナリズムを鼓舞し、エデンとしての理想的国家の後継者となるよう強要する。まずこの中の、作者の私的要因のレベルから話を進めよう。彼は、自分のどんな成功も祖先にとっては無価値に見えるだろうと考え、次のように彼らの言葉を想像する。

「小説本の作家だって！それが人生にどんな役割があるのだろうか——神の栄光を讃えることができるのか、あるいは生きていくあいだに人類に仕えることができるか？いや、あんな墮落したやつはバイオリン弾きにでもなった方がいいんだ！」¹²

芸術家としての心性が、硬直した父権的価値と対立する女性的心性と通じあうものとして、作者に把握されているのではなからうか。この点については、後で更に考えてみたい。ところで、作者のアイデンティティの実現を阻止しようとした現実の「父親代理」が、もう一人いる。母方の叔父ロバート・マニングである。彼に関連して、「恐ろしい地父」Chillingworthについて述べてみたい。

Chillingworth については、拙論1で述べたように、「原母」の使者として「息子」のもとへ派遣された「恐ろしい地父」である彼は、本質的には「原母」の否定面を具現しているが、父権的文化においては父元型として登場する。即ち、彼は、古いヨーロッパの伝統的な「知」を体現する「科学者」として、またピューリタンの自然観を反映するアメリカの野生の自然に親しむ「医者」として、天なる神に対抗して地上的な父権を主張する「悪魔」である。彼のこの地上的な父親としてのイメージに、非常に有能な実務家であった母方の叔父ロバート・マニングの性格が投影されていないだろうか。彼は母子家庭になった妹一家をひきとり、生活の一切の世話をした謂わば恩人である。しかし少年ホーソーンにとっては、自らのアイデンティティを無視し、望まぬ将来を押しつけてくる敵のように思われた節がある。Gloria C. Erlichは¹³『七破風の家』のピンチョン判事のモデルの一人として彼を挙げているし、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」などの主人公の「父親代理」に対する「罪意識」はロバートへのコンプレックスの投影であると言う。拙論1で論じたように、私見ではChillingworthの人物像に様々な点で母権制における「恐ろしい男性」元型のイメージが投影されているがゆえに、彼を「太母」の手先である「地父」と定義した。ノイマンはこの「恐ろしい男性」像は文化的に層を成して、母権制においては危険な動物や神官、そして「母方の叔父」として現われ、少年期の自我を脅かすと言う¹⁴。したがって原作の書かれた19世紀の父権制社会においても、父親の欠けた作者ホーソーン之母系の家庭にあって、彼の敵意の対象となったのが「母方の叔父」ロバートであったことも不自然ではない。それにしても不思議なのは、母子家庭における少年自我の憎悪の対象となる位置にある「母方の叔父」（ホーソーンの場合、ロバート）が、実際に「恐ろしい地父」元型にふさわしい、母権的な地上的価値観を体現していたことの偶然である。そして、作者にとって名実共に「恐ろしい地父」であったロバートがChillingworthのモデルであったとすれば、Chillingworthが作者の分身と思われるDimmesdaleの「恐ろしい地父」である、とする私見を裏付けることになる。

さて大杉博昭は、作者が憎んだのは叔父の好意ではなく、彼が体現していた「有能な実業家像」¹⁵だったと述べる。彼は、作者の意志に反して、マニング家の家業を継ぐ実業家にするために彼を大学に進学させようとしたのである。作者は大学には入ったものの、叔父の意図を裏切って作家修行に没頭し、最終的には作家になった。DimmesdaleがChillingworthを拒否した如く、作者は徹底的に叔父を拒否し、彼の結婚式にも葬式にも出席しなかったという。しかし大杉は、彼への反発こそが作者を創作活動に進め、作品を生み出す大きな原動力となったと述べる¹⁶。とすれば、Dimmesdaleが最後にChillingworthへの敵意にも拘わらず彼を「神の使者」と捉え、彼の派遣を神の慈悲と感謝した如く、ホーソーンもまた叔父に感謝すべき立場なのである。さて大杉は、叔父の「実学的な価値観」に対して作者が目指したのは「貧しく女性的な作家」であったと述べる¹⁷。原作において肉体的生命の維持と現世的な名誉や地位という地上的価値を押しつけることによって、Dimmesdaleの告白を阻止しようとしたChillingworthは、作者の私的レベルでは、「実学的な価値観」や経済的援助を押しつけて作者のアイデンティティの実現を阻止しようとした叔父の姿と重なってくる。また19世紀のアメリカという国家的なレベルに視点を変えると、地上的、実学的な価値観の継承者というペルソナを国民に押しつけてくる、「恐ろしい地父」元型にふさわしい状況とは、産業革命とそれによる一連の国民生活の向上をもたらした当時の目覚ましい科学技術の進歩への、国家的な期待と信頼であろう。前述の「庭園の神話」を考慮して言えば、

このような実学的価値観は、天上のエデンとしてのアメリカの追求を写真のポジとすると、その「農本主義」的な神話を破壊する——と同時に新しい世俗のエデンの実現を可能にする——機械文明を支える科学への信奉につながり、同じ神話の写真のネガのようなものと言えよう。¹⁸換言すれば、先述のエデンを実現しようとする傲慢なナショナリズムと上記の実学的価値観は、作者の求める理想国家のアイデンティティに反する、行き過ぎた父権的アメリカの表と裏なのである。

では、なぜ「作家」という職業が「女性的」なのであろうか。これに関連して、「税関」の中でホーソンが自分の想像力の働きを描写している有名な箇所を取り上げたい。彼は、朝や真昼の明るさとは違う夜の「月光」が、ロマンスを生み出すのに最適な効果を持つことを、次のように述べる。「月光」に照らされて「我々の見慣れた部屋の床がどこか現実の世界とおとぎの国とのあいだの中立地帯、現実のものと思像のものが一緒になり、それぞれに相手の性質がしみこんでくるような場所となったのである」と。この「魔法の月光」は、ノイマンの言う「母権的意識」と密接な関係がある。

この「母権的意識」は、無意識から男性的意識が独立して優位に立った状態にある「父権的意識」に対して、心のより初期の発展段階である母権的な層（「太母」段階）に属す「女性的な精神のありよう」に特徴的なものである。²⁰そして「男性にあっても、その心理の女性的な側面たるアニマの活動が活発になったとき、すなわち精神的危機や創造の過程において」²¹この意識が支配的になり、この意識の象徴が「月」であるというのだ。「月」は無意識の活動と関係が深く、無意識のメッセージを「受け入れる」という「母権的意識段階の自我に特有な態度」で靈感や直感という創造につながる啓示を受け取るのは、「月」が支配する夜、「昼よりも無意識が活発になり、内向的になる夜」である。²²無意識の活動は「父権的意識」には支配できない自律的な時に従い、「月が時を司るもの」であるがゆえに、自我は謂わば「月」が満ちて、無意識から「認識の光が浮かび上がって来る」のを「待ち通す」しかない。²³したがって「太陽の照りつける光線のもとにはなく、月の冷たい反射光のなかで、もし無意識の暗黒が大きいならば、そのとき創造の過程は息づく」²⁴というのである。ホーソンの創造活動に重要な意味を持つ「月光」をこのような「母権的意識」という視点から考える時、「作家」という彼の選んだアイデンティティは、深層心理から見ても女性性と切り離せないものであったと言えるのではなからうか。

したがって既に見た如く、女性原理と対立する硬直した男性原理を代表する作者の父方の祖先が、「作家」という職業を軽蔑したのも当然と言える。「共同体」が Dimmesdale に、父権体制の後継者としてのペルソナを押しつけたのと同様に、この祖先は、作者が国家の父権体制の強化に寄与していないことに失望し、「作家」である彼を軽蔑する。一方、元型的には母権制の権威を担う「恐ろしい地父」たる叔父ロバートも、近代父権制において実学的な価値を体現しており、Chillingworth が Dimmesdale の肉体と現世的な地位の享受を代償に告白を引き止めるのと同様に、実利的な職につくよう作者に強制する。両者共に作者の「作家」というアイデンティティ、即ち無意識の生き生きした活動を受け止める受動的な「母権的意識」に支えられた生き方を否定したのである。それは「共同体」と Chillingworth が共に Dimmesdale のアイデンティティの実現を阻止し、拙論 2 で考察した如くプシケー的な発達をもってその実現に貢献した、Hester の女性的価値をも否定しようとしたことに対応しているようだ。作者にとって、「父親代理」による自身のアイデンティティの否定、あるいは男性としての「自我」の独立の妨害という私的な問題が、そのアイデンティティが「母権的意識」に支えられたものであるがゆ

えに、父権的文化における女性性の否定という普遍的な文化の問題と表裏一体となり、更には19世紀アメリカの父権的ナショナリズムの傲慢さという国家的な問題につながっていることに注目しなければならない。DimmesdaleはHesterの聖性を引き出したうえで彼女との絆を認める告白を果たし、作者は「母権的意識」に基づく「作家」というアイデンティティを実現した。このように「恐ろしい父」の支配圏を脱出するにあたって、彼らを支えてくれた肯定的な「父親」像とは如何なるものか。また国家的なレベルにおいて、作者はそのような存在をどう捉えていたのであろうか。

II

Iの内容から、原作において「自我=Dimmesdale」の独立を支えた「原父」の肯定面は、作者自身の、また彼の考える国家的自我のアイデンティティをも認めてくれる存在であろうと推測できる。それは、Dimmesdaleが告白によって最終的に帰依した神の性格に表わされているに違いない。この神は、彼を通して姦婦Hesterに聖母的なイメージを与えることを許し、拙論3に論じたように「悪魔」Chillingworthを神の使者ナタンへと反転させて救済の可能性を示し、同時にChillingworthを介してDimmesdaleの罪を厳しく断罪したばかりでなく、彼に真の懺悔の決意をもたらしアイデンティティの実現と魂の救済へと導いたのである。「罪人に対する神様の裁きを疑う人は誰でも、ここに立ってください！……その恐ろしい証拠をごらん下さい！」とDimmesdaleは胸を公衆の眼に晒し、「私たちの破った掟！——ここでこのように恐ろしくもあらわにされた罪！——これだけを考えておくれ！私は恐ろしい！」とHesterに答えて、峻厳な神の裁きを示す。しかも「神様はお慈悲深い！……これらの苦悩のうちのどれが欠けていても、私は永遠に失われていただろう！」と断言し、神の慈悲と自らの救済の可能性を示して息絶えるのである。

神は傲慢な「共同体」の独善的な理想の追求を退け、測り難い神意によって人間の罪深さを裁き罰することによって、また慈悲と救済を司ることによって絶対者としての揺るぎない地位を示す。ここでは、人間と絶対的な神の間に越え難い溝がある。しかしながら、いったんDimmesdaleが「共同体」の優秀な後継者としての欺瞞的ペルソナを脱ぎ捨て、真の悔悟に到達して告白を果たし、アイデンティティを実現すると、神はピエタ像における神の子キリストを連想させるような死を彼に与えて、彼の行為が神意にかなったものであることを明示するばかりでなく、神自身と彼との「父-息子」関係を保証するのだ。この神の絶対性と「父-息子」関係の保証という、一見あい反する要素の両立は、いかにして可能になったのか。即ちDimmesdaleはいかにして測り難い神意を把握し、絶対的な神との間の越え難い溝を一挙に越えたのであろうか。告白の決意に至ったDimmesdaleの心の変化を追ってみよう。

森での会見で、いったんHesterの捨て身の愛情を受動的に受け入れて補充されたDimmesdaleのリビドーは、新しい説教の原稿の執筆と公衆の前での説教、そして罪の告白に消費される。そのリビドー変遷の理由、即ち彼がHesterとの逃亡計画の破棄と罪の告白に至った動機の説明は原作には無く、批評家の諸説あるなかで恩寵説が有力であるが、決定的とは言えない。私見では拙論3で述べたように、Chillingworthとの再会を契機として元型の分解が起こり、彼のイメージが「恐ろしい母」と「恐ろしい父」の両方からの使者、あるいは「悪魔」という否定面と、「神の使者」ナタンという肯定面とに分

解し、Dimmesdaleの内部で前者の克服と後者の統合が行なわれ、彼は神意に基づいて告白を決意したと思われる。Dimmesdaleが新たな認識を獲得し、Chillingworthの中に「神の使者」を見出したことは、青山義孝氏の主張するタイポロジーの手法に加えて、ナタンの壁掛けのある部屋でDimmesdaleとChillingworthが再会すること、その瞬間Dimmesdaleが聖書と胸に手を置いたこと、告白の際に彼がChillingworthの派遣は神意であり、それが神の慈悲であると断言したこと等によって裏付けられるのではないか。だが、神話では「英雄の仕事」として描かれているこの元型の分解は、なぜ起こったのか。恩寵説をとるにせよ、恩寵はいかなる時に訪れるものか考えてみたい。

神は「息子」Dimmesdaleに告白を決意させたばかりではなく、自らの似姿を新たな「共同体」のイメージとしてDimmesdaleに送り込み、彼は靈感につき動かされて新たな説教の原稿を書き上げたのである。彼が「天が自分のような汚れたオルガンの音管を通して、壮大厳粛な神託の音楽を伝えるのを適当とお思になったことをただただ不思議に」²⁹思ったように、この靈感は全く思いがけなく彼に天下り、彼はそれに導かれて一気に創造力をほとばしらせた。「彼は真剣に急ぎながらも、我を忘れる恍惚境のうちに、仕事を続けた。こうしてその夜は、あたかも翼のある駿馬のように、しかも彼がそれに乗って疾走するかのように、飛び去った。」³⁰拙論1で述べたように、ここでは英雄ペレロポンの怪物退治のイメージが現われ、この創造的行為が「自我」Dimmesdaleの「竜との戦い」の一部を成すものであることが暗示されている。即ち、元型的には「竜との戦い」における勝利によって獲得される「自我」Dimmesdaleの独立は、プロットのうえでは、Hesterとの逃亡計画を破棄し罪の告白を果たすことと、「作家」として作品（説教）を創造することによって獲得されたのである。この靈感に導かれた説教の執筆の描写は、作者の「作家」としてのアイデンティティについて述べた際の、「月」と「母権的意識」との密接な関係を連想させ、Dimmesdaleと作者に共通の女性的な資質を暗示し、彼らの同一性を一層強める。とすれば、創作活動をする時の作者と同様に、Dimmesdaleもその徹底的な受動性のゆえに、「月」が満ちた時初めて、Chillingworthの正体についての認識の光が、無意識から彼の意識に浮かび上がってきたのではないか。心理学的に言えば、元型の分解と統合はこうして起こり、宗教的な表現を使えば、恩寵はこうして天下ったのではないか。この女性的な資質である「母権的意識」があつて初めて、絶対者たる神と無力な人間との間の無限の溝が越えられ、「息子」は父神に直結し得ると作者は考えていたのではないか。こうしてみると「原父」の肯定面は、Dimmesdaleの神に象徴されるような人間の理性では測り知れない絶対的な存在であつて、「母権的意識」によってのみ捉えることが可能な父権的権威と言えそうである。

以上見てきたように、神の恩寵に与かるための資質と「作家」としてのアイデンティティは、「母権的意識」という女性的な共通項で結ばれていると言えそうである。Dimmesdaleは原作において、父神の恩寵と「作家」としてのアイデンティティの両方を獲得したが、作者は既に見たとおり、母方の叔父ロバートと父方の祖先という二種の「父親代理」によって心理的に妨害され、Dimmesdaleの神に当たる父権的権威にも恵まれず、職業選択に悩んだ過去を持っていた。また「税関」には、「作家」としてのアイデンティティに反して、生活のためにセイラムの税関に勤務する憂鬱な毎日が描写されている。絶対的な父神に支えられたDimmesdaleの勝利は、そのような過去と現在の閉塞的な作者の私的状況の補償であるのかもしれない。しかしながら作者は、より現実に近い「税関」の舞台に、もう一人の肯

定的な「父親」像を登場させる。過去の実在の税関監督官、ジョナサン・ピューの亡霊である。彼は自らを作者の「役職上の先祖」と見なし、「彼に対する子としての義務と尊敬を神聖に考えて」³¹彼の書き遺した Hester の生涯の物語を世間に出すようにと命じ、作者はそれに忠実に従ったというのである。即ち作者は、偉大な「父親」ピュー氏に「息子」として霊的に直結することによって、Dimmesdale と同様に一人の男性として父権的世界に参入すると共に、文筆家としての彼から「作家」というアイデンティティを継承したのである。「税関」にも、実際に想像力を鈍らせる税関勤務を免職になり（謂わば「母方の叔父」の実利的支配力にも似た影響力を脱し）、父方の祖先の精神的な影響力のもとにある故郷セイラムをあとにして、即ち二種類の「父親代理」から解放され、『緋文字』執筆によって一人の自立した「作家」としてロゴスの世界に再生する作者の姿が描かれる。ピュー氏は、作者にとって謂わばロゴスの世界の父神とも言えよう。

この絶対的な「父親」像との神秘的な直結をもたらす「母権的意識」の肯定は、当然ながら豊かな女性性の肯定につながる。Dimmesdale の「恐ろしい精神父」としての「共同体」も作者の父方の祖先も、「自然」と直結した豊かな女性的価値を抑圧する、硬直した父権的価値を代表している。しかし、新たな父神は Dimmesdale を通して、「共同体」が排除しようとした Hester の女性性、あるいは「太母」性から純粹な愛情を抽出して聖母イメージを与え、これを受け入れる。またピュー氏が「息子」たる作者に与えた題材は、Hester の女性であるがゆえの苦悩に満ちた生涯であった。この「父親」もまた、埋もれかけていた女性的価値を掘り起こして再評価しようとするのである。作者はこのような形で祖先の罪を償うと同時に、女性性の復権を果たし、行き過ぎた父権的文化の是正に一役買ったのではないか。しかしながら、原作では Hester の「太母」イメージが神意によって「聖母」へと純化され、「税関」には「その物語の主要な事実が検査官ピュー氏の文書によって正当と認められ、確証を与えられている」³²と作者が述べるように、Hester の生涯の作品化は「父神」ピュー氏によって規定されている。即ち、「母権的意識」に裏打ちされた男性的自我の独立と表裏一体を成す女性性の肯定は、肯定的な「父親」像によって制限されるがゆえに、「太母」像、あるいはフィードラーの言う「大なる女神」の全面的な復権とはなり得ない。そこにどのような規制が働くのか、次に Dimmesdale の拒否した「恐ろしい母」の性質を分析してみたい。

III

原作には「原母」の否定面、即ち「恐ろしい母」が、Hester の二つの面によって表わされているようだ。一つは姦婦としての奔放な性的情熱、もう一つはアン・ハッチンソンの社会改革や19世紀の女権拡張論を思わせるフェミニズム的な視点、そしてエマソンを思わせる超絶主義的な言葉等に示される新思想である。前者は「共同体」に Hester を「緋色の女」、「バビロンの女」と呼ばせる激しい情念であり、拙論1においては、Dimmesdale が徹夜の苦行などで抵抗を示している、「太母」Hester の否定的な支配力として論じた。この情念は、他の作品のヒロインであるゼノビアやミリアムなどのいわゆる 'Dark Lady' にも具現されるもので、フィービーやプリシラ、ヒルダといった 'Fair Lady' の無垢の対極にある。レスリー・フィードラーは、'Dark Lady' の原型をシェイクスピアの黒婦人とロマン

派の「つれなき美女」³⁴という概念の混合に見出だし、クーパーが‘Dark Lady’と‘Fair Lady’の対照に装飾的ではなく、象徴的な意味を最初に与えたとする。それが『モヒカン族の最後の者』に登場するコーラとアリスの姉妹である。ほぼ同時代のホーソーンもその文学的手法を用いたわけだが、ヤングは作家と彼の姉エリザベスと妹のルイザとの現実の三角関係を想定し、彼の作品に現れるこの二種類の女性の対立を、私的な事情と結び付ける。そればかりでなく、作家の生涯にわたる近親相姦のテーマと関連させて、姉との間に近親相姦を疑っている。³⁵姉エリザベスは、‘Dark Lady’の風貌に似た非常に知的な美女で、作者と妻ソフィアの結婚に強硬に反対し、後までも決して許そうとしなかったという。神徳昭介氏が述べるように、確かにジュリアンとローズという作家の実の子供達が察するほどの「濃密なく近親相姦」³⁶の雰囲気³⁶が、彼らの間にあったのであろう。しかし、作家の作品に現われる近親相姦のテーマは、グロリア・アーリックによればゴシック・ロマンスの中心テーマである「兄弟姉妹間の相姦関係」という「文学遺産」が「家族体験によって増幅されたもの」であると言えよう。³⁷事実はどうであれ、母と姉妹に囲まれた長い独身生活ときわめて閉鎖的な環境にあって、濃密な親近感に結ばれた姉と弟の関係に、作家がひきつけられながらも罪悪感を抱くのは自然な成り行きであろう。事実の如何より、彼が姉のような知的な美女に対する憧れを罪深いものとして危険視し、その恐怖感や罪悪感を‘Dark Lady’のイメージの中に投影したことの意味の方が重要である。それは、姉への実際の感情を単に虚構の世界に移し換えただけのことであろうか。

進路に悩んでいた頃、ホーソーンは「僕はどうして女の子に生まれつかなかったのでしょうか。そうすれば、一生お母さんのエプロンに、ピンで留めておいてもらえたでしょうに」³⁸と手紙で嘆くほど、実母への依存も強かったと思われる。(姉エリザベスも母の美貌を受け継いでいたという。)フィードラーも、フロイト理論のエディプス的な状況を Hester, Chillingworth, Dimmesdale の関係に見出だしており、彼が作品に描いたのは「彼自身の良心の危機であり、ヘスターの中に投影された彼自身の女性体験である」³⁹と述べる。また、原作の執筆中に死の床にあった母を毎日見ていた作家は、「母性的なものの神秘を感知した」⁴⁰と述べ、作品へのその影響を暗示する。男性的自我の独立を果たすためには、誰も母なるものと決別し、自我を無意識の中へ溶解させようとする「太母」の否定面から解放されなければならない。近親相姦の有無よりも、母や姉の甘美な引力がそのような否定的な支配力として捉えられ、作品化されていることに注目したい。更に母方のマニング家の過去には、忌まわしい近親相姦の事実があった。⁴¹1681年にはアンスチス・マニングと妹のマーガレットは、兄ニコラスとの近親相姦の罪により Hester のように公衆の面前で晒し台に立たされていた。現存する法廷記録によると、ニコラスの非常に動物的な人物像が浮かびあがる。岩田強氏は、作家が父方の祖先については言及しても、母方の近親相姦事件については黙秘を通したことから、「口にださうる感情はむしろ根があさいとも言える」と、作家の拘りの強さを暗示する。確かにその通りであろうが、彼の拘りは近親相姦という個別の事実に向けられたものというよりは、母方の祖先の忌まわしい情念の罪のイメージが、母や姉の濃密な情愛の支配力と混じりあって形成された、否定的な「母なるもの」に向けられたと言うべきであろう。したがって近親相姦のテーマや‘Dark Lady’は、作者の男性的自我の独立を阻止する「太母」的な情念を象徴する記号として、常に主人公の抵抗の対象となるのである。男性的自我が克服しなければならない「太母」元型の否定面が、作者の場合、現実の母や姉というモデルの存在や母方の祖先の近親相姦事件によっ

で一層強く意識され、それが Hester の人物像にも描きこまれたものに違いない。

興味深いのは、19世紀の時代思潮がその否定的な情念を示す記号と結び付けて語られることであり、それがもう一つの「恐ろしい母」の支配力となっていることである。有名な森での Hester と Dimmesdale の再会の場面で、彼女は彼に「共同体」からの逃亡を提案した時、こう言いながら胸から緋文字をはずし、地味な帽子を脱いで豊かな黒髪を肩に垂らして女性美を誇示する。「過去は振り返らないことにしましょう。……過去は過ぎ去りました。どうして今そんなものの上にためらう必要がありましょう。ごらんなさい！この印といっしょに、私は過去をもとにかえし、なかったのと同じにさせていただきますわ！」⁴³ 青山義孝氏はこの言葉にエマソンの超絶思想の中核たる「時間の否定」を見出だす。⁴⁴ また、「思索の自由」を身につけた彼女は、「世間の法はヘスターの心の法ではなかった」と描写され、エマソンの「自己信頼」を体現しているというのだ。⁴⁵ Dimmesdale を逃亡に誘う彼女の言葉の中には、エマソンの唱える「無限の空間」としての森のイメージが明らかである。「この果てしない森の中にだって、ロジャー・チリングワースの目からあなたの心を隠すだけの陰がないでしょうか？」⁴⁶ ところが、外した緋文字は再び胸に付けられ、黒髪も帽子の中にしまいこまれる。青山氏は『『緋文字』でホーソーンはエマソンの思想をヘスターに代弁させ、エマソンの森を忠実に再現しながら、まるで手袋を脱ぐようにくると裏返してみせたのである』と述べる。⁴⁷ 原作では、彼女の逃亡計画を受け入れた Dimmesdale は、帰途、悪の発作の如く罪深い誘惑に次々に襲われ、結局その計画を拒否するばかりでなく、彼の死後かなり経ってヨーロッパから一人で帰国した Hester も、自ら緋文字を胸に付けて余生をおくる。エマソン流の人生観は、作者によって完全に否定されたのである。

女権拡張論についても性的情熱と罪の雰囲気がつきまとう。「女性の中で最も幸福になるものにとってさえも、人間の存在は受けるに値するものであろうか？」⁴⁸ と自問しながらも、試練に耐えて強く生きぬき、「私達のしたことには、神聖なものがありました。」⁴⁹ と断言する Hester は一種のフェミニストと考えられるであろうが、明確にフェミニストとしての立場を語ったのは『ブライズデイル・ロマンス』のゼノビアである。そして彼女は、初対面の際にカヴァデイルにイヴの如き裸体を想像させ、常にその豊満な肉体で彼を脅かすのだ。同様に、もしパールが生まれていなかったなら、Hester が共にピューリタン神権体制の基礎を破壊しようとしたかもしれない人物、即ち女性宗教指導者アン・ハッチンソンについても、「ホーソーンは1830年のセイラム・ガゼット誌ではく自ら、それとは気付いていないが、彼女が、自分の教義を恐れる、これら多くの学識豊かな、著名な男達を見回す時、その目には半ば隠された官能なおごりが閃いていた」と、その<攻撃性>を非難している。」と神徳氏は述べる。⁵⁰ このように、ロマンチックな人生観や革新的な思想を Hester (やゼノビア) の奔放な性的情熱と結び付け、しかも Dimmesdale のアイデンティティを破壊するものとして彼に (ゼノビアの場合は、彼女の愛したホリングズワースと作者の分身と思われるカヴァデイルの両方に) 拒絶させていることは、そのような考え方を男性的自我の独立を脅かす無意識の支配力、あるいは理性を失わせるような「太母」的な本能の暴走と同一視し、危険視する作者の姿勢を示すものであろう。否定的な「太母」像で表わされる無意識の支配力への元型的な陶醉とそれを上回る反発が、母方の祖先によって現実に犯された近親相姦の罪への嫌悪と、自身の姉妹との近親相姦的な雰囲気や母への依存に対するアンヴィバレントな感情という私的要因と結び付いて、作品中では、'Dark Lady' への憧れと憎悪や恐怖、そして生涯にわたる近親

相姦のテーマへの拘り、更には19世紀の時代思潮という、より普遍的なものへの共鳴を含んだ批判として表現されたのではないか。したがって、エマソンの超絶主義やマーガレット・フラーの女権拡張論、ブルック・ファームの空想的な社会改革などは、元型的には女性原理として捉えられているにも拘わらず、当時のアメリカの行き過ぎた父権的価値観における女性性抑圧という欠陥を補い、国家的自我を再生させる原理とはなり得ない、というのが作者の立場である。Ⅰ、Ⅱで論じたように、女性性の肯定と再評価に並々ならぬ共感を示しながらも、先述の私的な事情もあってホーソーンは、女性性や女性的情念に内包される破壊力や危険性にも人一倍敏感であったに違いない。とすれば、彼の肯定する女性性とはどのようなものであろうか。

Ⅳ

作者がDimmesdaleを通して受け入れる、「原母」Hesterの肯定面は、恋人Dimmesdaleへの献身的な愛とPearlに注がれる母性愛、「慈悲の修道女」としての無私の奉仕活動、そしてDimmesdaleから与えられた「聖母」的な役割の中に描かれている。最終的には「聖母」イメージに到達するDimmesdaleへの愛は、拙論2で考察したように、既にプロットの発端から意識的な命懸けのものであった。神話のプシケーにも似た過程を経て、彼女は姦通によって「原両親の分離」を果たす。その結果、女性を「いけにえ」として「非存在」に閉じ込める「父権的ウロボロス」段階からも、男性を敵視する「太母」段階からも共に解放され、「自我-意識」に目覚め、Dimmesdaleを主体的に愛するようになったのである。一方、意識に目覚めたHesterによって否応無く「暗闇の楽園」から追放された彼にとって、姦通は「情熱の罪」に過ぎず、エロース同様に傷ついただけで覚醒させられたわけではない。この二人の意識発達のずれが、Hesterに真の愛を実現すべくDimmesdaleの成長を常に先導させ、彼女を「プシケーの失敗」にも似た森での情熱的な介入へと促すことになった。その介入が彼にリビドーを補給し、一方でそれがChillingworthについての新たな認識によって告白の原動力となり、他方で天馬ベガサスに象徴される芸術的創造へと昇華されたことから、結果的に彼女は彼をアイデンティティの実現に導いたと言えよう。

意識的な愛に目覚めた女性が男性をアイデンティティの実現へと先導し、しかもそのアイデンティティが「作家」活動であるというプロセスは、作者と姉エリザベスの関係を思い起こさせる。フィリップ・ヤングは二人の間に近親相姦を疑っているが、その可能性さえ想起させるほどの弟への強い愛情も、それが父権的な意識に伴われて働く場合には、Ⅲで考察したような無意識の破壊的な情念として拒否されるのではなく、プシケーがエロースを成長させたように、逆に自我の独立を促す産出的な力として作家に受け入れられたであろう。大杉氏は「ヤングの視点からは、姉が先行し開示してくれた文学の世界に、自分も参入したいというナサニエルの切望が、完全に欠落しているのである⁵¹」と述べる。幼い頃から並外れて聡明なうえに大変な読書好きで、弟ホーソーンに強い影響を与えた彼女は、「弟の最も良き理解者であると同時に、厳格な批評家でもあった⁵²」という。こうしてみると、彼女はある一定の美德や性質の持ち主としての女性性というより、男性を自我の独立、あるいはアイデンティティの実現へと促す、それ自体発展するプロセスとしての女性原理を体現していると考えられる。

一方、作家の妻ソフィアもまた、家庭的な愛情で彼の「作家」活動を助けた。『緋文字』執筆の際には、税関を解雇された作者が帰宅して事情を話すと、彼女は陽気に「まあ、それでは……あなた、御本が書けるわね。」⁵³と叫んだという。そして、家計を心配する夫に内緒の貯えを見せて安心させ、彼は早速その日の午後から執筆にとりかかることができたというのである。まるで山之内一豊の妻を思い出させるような挿話であるが、平凡ながら家庭の天使として夫に仕え、ささやかな炉辺の幸福を守るフィービーかプリシラのような姿である。まさに「太母」イメージから否定面を切り捨てた「聖母」としての Hester が、アイデンティティの実現へと進む Dimmesdale の介添えをするように、ソフィアは作者を支えるのである。即ち自ら成長する女性原理としてのエリザベスとは対照的に、ソフィアは男性への完全な信頼と無私の献身という特定の女性的美德を表わしていると思われる。そしてその両方の女性性が、Dimmesdale にとっても作者ホーソンにとっても必要不可欠だったのであり、共に Hester の人物像に描きこまれているのではなかろうか。

Pearl への母性愛は、結果として Hester 自身の「聖母」化に貢献することとなる。即ち、Pearl は時には母にヒビズ女史からの森への誘いを断わらせ、また時にはアン・ハッチンソンのような活動を抑制させ、最終的には森で胸の緋文字をはずした母に再びそれを付けさせ、過去を否定するエマソンの態度を非難することによって、肉体的にも精神的にも Hester の情念の暴走を抑制する役割を果たしている。また作者の奨励する社会改革は、ピューリタン神権体制を覆すようなアン・ハッチンソンのものではなく、「慈悲の修道女」としての個人的で地味な心のこもった奉仕活動である。また作者が Hester に与えたフェミニズムは、声高な権利の主張ではなく、悩める女性の相談役として彼女達をなぐさめ、男女相互の幸福を土台にした新しい時代の到来を予言して力付けることであり、更には「聖母」として絶対的な父神と人間の間を仲介することである。

このように「原母」の肯定面は、豊かな「太母」性を意識的な愛によって抑制し、飽くまでも絶対的な父性的権威と「息子」との直結の仲介をとるか、アイデンティティの実現を目指す「息子」の先導や介添えに徹することである。Dimmesdale は、元型的自我発達プロセスを歩む Hester の先導と最終的な介添えによって告白を果たし、作者は姉エリザベスの先導と妻ソフィアの介添えによって「作家」としてのアイデンティティを実現したのである。

V

さて以上、作品『緋文字』の意味を、その元型的な構成に対応する、執筆の私的要因と社会的要因の両方の視点から追ってみた。原作では最終的に「息子＝自我」Dimmesdale を中心に四つの元型的イメージが対立することになる。「息子＝自我」の独立を阻止しようとする「原父」の否定面（恐ろしい父）と「原母」の否定面（恐ろしい母）、逆に「息子」の独立を助けようとする「原父」の肯定面と「原母」の肯定面である。「恐ろしい父」は「共同体」と Chillingworth によって表わされる力で、豊かな女性性を抑圧する、行き詰まり硬直した父権的文化を象徴している。「恐ろしい母」は、「太母」Hester の奔放な性的情念と新思想（アン・ハッチンソンの社会改革、フェミニズム、超絶主義的な人生観）によって表わされ、「自我」に対する無意識の支配力を象徴する。肯定的な「父親」像は、Dimmesdale

が最終的に帰依した神によって表わされ、女性性を肯定し、「母権的意識」によってのみ「息子」に直結し得る絶対的な父性原理、あるいは父権的価値観を象徴する。そして肯定的な「母親」像は、Dimmesdaleを独立へと導くHesterの女性としての成長プロセス、彼の告白の介添えをする彼女の「聖母」イメージ、Pearlへの母性愛、「慈悲の修道女」としての活動等で表わされ、男性的自我と絶対的な父性原理とを結び、自我の独立やアイデンティティの実現を助ける、純粹で意識的な愛を象徴する。

では作品執筆の動機となった、作者の私的要因をまとめてみよう。「恐ろしい精神父」は、クエイカー教徒迫害と魔女裁判で悪名高い父方のピューリタンの祖先に、「恐ろしい地父」は実学的な価値観を代表する母方の叔父ロバートにほぼ該当し、共に作者の「作家」としての女性性を含むアイデンティティを否定する。「恐ろしい母」は、作者の母へのエディプス的な依存、姉エリザベスとの近親相姦的な感情、母方の祖先の近親相姦の罪等に象徴される情念であり、作者の男性としての自立を脅かす。肯定的な「父親」は、昔の税関検査官ピュー氏で、作品中で作者に作品『緋文字』の題材を与え、Hesterの生涯を作品化するよう命じる。肯定的な「母親」は、文学世界への先導者としての姉エリザベスと協力者としての妻ソフィアである。作者は、姉に先導され妻に援助されて、祖先と叔父の想像上の、また現実の妨害を押し切り、「母権的意識」によってピュー氏に象徴されるロゴスの世界の父神に靈的に直結し、「作家」としてのアイデンティティを獲得し、男性として「作家」としての自立を果たす。と同時に、ソフィアとの結婚によって母や姉、母方の祖先等に象徴される「太母」の否定的支配力を克服したプロセスを、Hesterの人物造形と彼女の心理的発達、そしてDimmesdaleの彼女との関わりの中に描きこんだのではないか。執筆の私的要因として、このようなプロセスが考えられるのである。

では、社会的要因については、どうであろうか。社会的レベルでは「恐ろしい精神父」は、「庭園の神話」に支えられた、完璧な理想社会を希求する非常に父権的な19世紀アメリカのナショナリズム、「恐ろしい地父」は、科学技術への国民的な信頼と期待である。これらは、傲慢にもアメリカをメシアとして世界の中心に位置づけようとせずにはいない。一方「恐ろしい母」は、そのような父権的國家の現実に反発して提示された新しい方向性、即ちブルック・ファーム的な社会改革、マーガレット・フルー的な女権拡張論、エマソンが代表する超絶主義等のロマンチックな新しい価値観に当たる。そして肯定的な「父親」像は、硬直した父権的文化の欠陥を女性原理の導入によって克服しようとする、新しい絶対的な父性原理でなければならない。原作では、ピューリタン神がそれに当たるが、19世紀の現実社会においては、上記の三者（「恐ろしい精神父」以下の）を拒否する原理であること以外は、明確に断言はできない。また肯定的な「母親」像は、国家的自我をそのような新しい父権的価値観に直結させる、仲介者としての女性性である。原作には男性への意識的で抑制された純愛、献身的な母性愛、「聖母」崇拜、個人の自発的な慈善活動、男女の幸福が実現するように社会の成熟を待つ穏やかなフェミニズム等が暗示されている。作者は、19世紀の科学技術への熱狂的な期待に伴われた、非常に父権的なナショナリズムへの批判を描くと同時に、そのような父権的価値観への抵抗という意味でロマンチックな新思想を女性原理と捉えながら、結局それらを自我の独立を脅かす情念の暴走と同一視し、否定する。作者にとって国家的自我が、意識的な女性性の仲介と自らの「母権的意識」によって直結すべき父性原理が何であったのか、稿を改めて論じたい。

注

1. 拙論『デイズデイルの精神的変貌—自我発達の元型的プロセスについて—』鹿児島女子短期大学「紀要」第26号, (1991) 所収 以下同様に, 拙論2, 3は各々次の論文を指す。
拙論2: 『ヘスターとプリケー—<緋文字>に潜む女性的心理発達のプロセス—』同, 第29号, (1994) 所収
拙論3: 『*The Scarlet Letter*における Chillingworth の両犠牲—<悪魔>と<神の使者>—』同, 第30号, (1995) 所収
2. エリッヒ・ノイマン, 『意識の起源史 (上)』, 林道義訳 (紀伊国屋, 1984), p. 17.
3. 河合隼雄, 『昔話の深層』(福音館書店, 1977), pp. 14-21. 『昔話と日本人の心』(岩波書店, 1982), pp. 11-18. 参照のこと。
4. ナサニエル・ホーソン, 『緋文字』, 刈田元司訳 (旺文社, 1967), p. 14.
5. ジュール・ミシュレ, 『魔女 (上)』, 篠田浩一郎訳 (岩波文庫, 1992), p. 9.
6. レスリー・A・フィードラー, 『アメリカ小説における愛と死』佐伯彰一他訳 (新潮社, 1989), p.49.
7. 大井浩二, 『ナサニエル・ホーソン論』(南雲堂, 1974), p. 123.
8. 同上, p. 118.
9. 同上, p. 122.
10. フィードラー前掲書, p. 50.
11. 河合隼雄, 『母性社会日本の病理』(中央公論社, 1990), p. 9-11.
12. ホーソン前掲書, p. 15.
13. Gloria C. Erlich, *Family Themes and Hawthorne's Fiction*, The Tenacious Web, Rutgers University Press, (New Brunswick, New Jersey, 1984), pp. 112-116.
14. エリッヒ・ノイマン, 『意識の起源史 (下)』林道義訳 (紀伊国屋, 1984), p. 265.
15. 大杉博昭, 『灯心記』(近代文芸社, 1990), p. 207.
16. Loc. cit.
17. Loc. cit.
18. 大井浩二前掲書, p. 76.
19. ホーソン前掲書, p. 47.
20. エリッヒ・ノイマン, 『女性の深層』松代洋一他訳 (紀伊国屋書店, 1989), p. 79.
21. 同上, p. 80.
22. 同上, p. 97.
23. 同上, p. 105-6.
24. 同上, p. 112.
25. ホーソン前掲書, p. 323.
26. 同上, p. 324.
27. 同上, p. 325.
28. 青山義孝, 『ホーソン研究—時間と空間と終末論的想像力—』(英宝社, 1991) pp. 49-63.
29. ホーソン前掲書, pp. 283-4.
30. 同上, p. 284.
31. 同上, p. 44.

32. 同上, p. 43.
33. 同上, p. 133.
34. フィードラー前掲書, p. 325.
35. Young, Philip. *Hawthorne's Secret: An Untold-Tale*, Boston: David R. Godline, 1984.
36. 神徳昭甫, 『炎と円環』(株式会社ニューカレント インターナショナル, 1992) p. 182.
37. Erlich, op. cit., p. 93.
38. 大杉博昭前掲書, p. 193.
39. フィードラー前掲書, p. 253.
40. Loc. cit.
41. 岩田強「はらからの絆」光華女子大学英米文学会編『夢の変奏—英米文学に描かれた愛—』(大阪教育図書, 1994) 所収, pp. 153-197.
42. 同上, p. 197.
43. ホーソン前掲書, p. 254.
44. 青山義孝前掲書, p. 41-2.
45. ホーソン前掲書, p. 203.
46. 同上, p. 247.
47. 青山義孝前掲書, p. 44.
48. ホーソン前掲書, p. 205.
49. ホーソン前掲書, p. 244.
50. 神徳昭甫前掲書, p. 95.
51. 大杉博昭前掲書, p. 192-3.
52. 同上, p. 209.
53. 神徳昭甫前掲書, p. 77.

参考文献

- Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*, New York: Oxford U. P., 1966.
- Erlich, Golria C. *Family Themes and Hawthorne's Fiction*, New Jersey: The Tenacious Web, Rutgers University Press, 1984.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter: The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* Vol. I, ed. William Chavat et al. Ohio State University Press, 1978.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne*, ed. Norman Holmes Pearson. New York: The Modern Library, 1965.
- Mcpherson, Hugo. *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination*, Canada: University of Toronto Press, 1971.
- Stein, William Bysshe. *Hawthorne's Faust: A Study of the Devil Archetype*, Archon Books, 1968.
- Young, Philip. *Hawthorne's Secret: An Untold-Tale*, Boston: David R. Godline, 1984.

- C. G. ユング, 『分析心理学』, 小川捷之訳 (みすず書房, 1994年)
- D・H・ロレンス, 『D・H・ロレンス—アメリカ古典文学研究』(研究社, 1974年)
- エリッヒ・ノイマン, 『意識の起源史(上・下)』, 林道義訳(紀伊国屋書店, 1984年)
- エリッヒ・ノイマン, 『アモールとプシケー』河合隼雄監修 玉谷直美・井上博継共訳(紀伊国屋書店, 1989年)
- エリッヒ・ノイマン, 『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男共訳(紀伊国屋書店, 1989)
- レスリー・A・フィードラー, 『アメリカの小説における愛と死』佐伯彰一他訳(新潮社, 1989年)
- R. W. B. ルイス, 『アメリカのアダム』, 斎藤光訳(研究社, 1973年)
- ナサニエル・ホーソーン, 『緋文字』刈田元司訳(旺文社, 1967年)
- J. ミシュレ, 『魔女(上・下)』篠田浩一郎訳(岩波文庫, 1991年)
- 青山義孝, 『ホーソン研究—時間と空間と終末論的想像力—』(英宝社, 1991年)
- 岩田強, 「はらからの絆—ホーソンの描かなかったく愛—」光華女子大学英米文学会編『夢の変奏—英米文学に描かれた愛—』(大阪教育図書, 1994年)所収
- 大井浩二, 『ホーソン論』(南雲堂, 1974年)
- 大杉博昭, 『灯心記—作家・詩人論他十二章』(近代文芸社, 1990年)
- 河合隼雄, 『昔話の深層』(福音館書店, 1977年)
- 『昔話と日本人の心』(岩波書店, 1982年)
- 『母性社会日本の病理』(中央公論社, 1990年)
- 神徳昭甫, 『炎と円環—ホーソン文学の両犠牲—』(株式会社ニューカレント インターナショナル, 1992年)
- 越川芳明編, 『アメリカ文学のヒーロー』(成美堂, 1991年)
- 小山敏三郎, 『セイラムの魔女狩り』(南雲堂, 1991年)
- 酒本雅之, 『アメリカ文学をどう読み解くか—文学史の構築をめざして—』(中教出版, 1978年)
- 周藤康生, 『ホーソン研究』(大阪教育図書, 1993年)
- 増田英夫, 『ホーソンとジェイムズ』(山口書店, 1990年)
- 八木敏雄, 『アメリカン・ゴシックの水脈』(研究社, 1992年)